慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	銀行業の公共性を論じ山崎博士の批評に答ふ
Sub Title	
Author	勝田, 貞次
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.12 (1924. 12) ,p.1833(151)- 1849(167)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19241201-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「何の不生産」なるかを限定せざれば、此の區別は無用なるに留まらずして、却て有害である。何となれば唯だ無暗に不生産的なりと云ふ時、は動もすれば之を輕視する弊に陷るを免れないからである。茲に於て福田博士の如きは、斷然斯る術語の使用を排斥して居る。其の所説の一端に曰く「……不生産的と云つたとて、決して之を蔑にする譯ではないとは、能く經濟學者の辯明する所ですが、此の如き辯明が屢々必要とせらるゝのは、即ち其の樣な誤解の無理ならぬ事を證明する所以であります。生産的勞働と云へば聞えが宜しく、不生産的勞働と云へば聞えが惡いのは、寧ろ當然で、其を左樣に解釋してはならぬと云ふのは、反つて人に無理を强ひるものであります。……私は經濟學上の術語として、獨り勞働に限らず、一切生産的、不生産的の區別を驅除し去る可きものと信ずるのであります。よつて勞働に、生産的勞働、不生産的勞働を區別することを、無用にして且つ往々有害なる事と信じて斷然之を取らないのであります。結果に於て失敗に歸した爲めに、不生産的となつた勞働を特に指名する必要がある時は、失敗した勞働とさへ云へば、事は足ります。云々」と。（福田博士著「國民經濟講話」、坤前册勞働經濟講話第二十四章八五一頁乃至八五八頁參照）

何れにしても生産的及び不生産的なる語の使用せらるゝ區別は、總て甚だ薄弱であり、又不確實性を帶びるものである。故にマーシャルも、今日是等の語の使用は殆んど價値なきことであるとの斷案を下したのである。乍併今日斯る術語を斷然廢棄する時は、樣々の障害を來す原因とならう　何となれば是等の語は長き歷史を有し、且又今日使用せる多くの經濟書には是等の語が使用せられ居るを以てである。勿論私も過去及び現在の諸經濟學者の見解に贊して、是等の語が一日も早く經濟學上の術語たる資格を失はんことを望む一人ではあるけれども、併し今日之を端的に廢棄して種々の障害を來さんよりは、寧ろマーシャルの所説の如く、徐々に其の使用を限定して、最後に之を無用ならしむるに如くはないと思ふ。斯くして生産的勞働、生産的消費等の成語も、近き將來に於て單に經濟學説史上に於ける一學説、例へば生産的勞働説、生産的消費説としてのみ取扱はるゝに至るであらう。（完）

銀行業の公共性を論じ山崎博士の批評に答ふ

勝田貞次

一

余は「銀行研究」第一卷第三號に於て、光山祐次郎の匿名を以て「銀行の本質」を論じ、山崎博士の銀行に關する定義を一考したるに對し博士は早速經濟學論集第一卷第一號に於て「貨幣又は金融に關する卑見の批評に對して」と題する一文を揭げられ、そのうちの一部分に於て余の意見に對して懇切なる批評を惠まれた。之に對して余は深く博士に感謝しなければならぬ。同時にまた一應の應答をしなければならぬのであつたが折惡しく余は海外に研究中にて歸省後も多忙を極め、爲めに余の應答が今日迄延引した

る點に就ては博士の寛容を乞はなければならぬ。茲に余は博士と余との間の見解の相違點を述べて、再び博士の高敎に浴さんと欲する次第である行文不遜の非禮を謝すると共に敢て微笑を以て一讀されんことを乞ふ。

二

先づ第一に余が嚮に「銀行の本質」に於て述べたる處を要約するに、それは即ち左の如くである。

「金融業者の中是だけが獨り銀行業であるとして、金融業から銀行業をば區別する處の何等の標準もなしに、漫然と『余は元來銀行なるものに就て狹義の見解を持し』と云はれたのみでは吾人は途方に暮れざるを得ない。勿論之はダンバー敎授にのみ限つた事でなく、銀行に對して稍々廣義の解釋を採らるゝ山崎覺次郎博士にしても同じ事で、即ち何故に特に博士が廣義を選ばれ、狹義の解釋を捨てらるゝかに就ては博士自身も其根據を明かにして居られぬ樣である。……自分は斯ふ云ふものを以て銀行業とするのだと云ふ命名論、獨斷論の代りに、之が銀行業であると云はるべき處の銀行業と他業とを別つ『限界標徵』を捉へる必要がないだろうか。兩替業が銀行業に非ず、金貸業が銀行業に非ず、質屋業が銀行業に非ず、無盡業が銀行業に非ず、金融組合が銀行業にあらずと云はれ得べき爲には何が銀行業を根據付て居るのかを考へる必要がないであらうか。……然らば銀行業とは何ぞや。換言すれば銀行業をして可能ならしむる根源の原理は何ぞや。吾人を以てすれば夫は貨幣貸借關係其者である。勿論總ての貨幣貸借關係ではない。完全の域に達したる貨幣貸借關係が銀行業の根本である。即ち貨幣貸借とその完全性とが銀行業を限定する標徵である。貨幣貸借關係は消極的の限界であり、その完全性は積極的の限界である。銀行業は貨幣貸借關係がその完全性を得んとする所に始まり、その完全性の進歩と共に銀行業も理想に近くのである。……

然らば貨幣貸借關係の完全性とは何であるか。余は斯る貨幣貸借關係の完全性をば、（一）貸借の共存、（二）貸借の一般性、（三）貸借の有意義性、（四）貸借の確實性の四に求める。……（一）貸借の共存とは即ち貸すと共に借り、借りると共に貸す事を意味するのであつて、現にリカルドは銀行業たる特色はそれが外來資金を運用するに始まるとなし、バジオットは更に自己資金を用ふる間は單に金貸業に過ぎないと斷言して居る。同時にまた貸出を行はず借入資金を自己の營業に投ずるが如きは全く一種の金策行爲であつて、銀行業ではないのである。銀行業は貸出と借入とを並び行ふ事に依てのみ茲に始めて銀行業として認めらるゝに至るものである。……（二）貸借の一般性とは貸借が公衆をその對手として居なければならぬ事を意味する。銀行が或特定の個人から金を借て他特定の個人に金を貸する間は、假令、自己の計算と危險とに於て借を貸し變ずるとも決してそれは銀行業たり得ないのである。（三）貸借の有意義性とは銀行の一般性からして必然に結果する所の銀行業の本質であつて、即ち銀行は自己の貸與した資金が如何に使はれるかと云ふ事に關して責任を持つ可きであつて、一國全體の經濟的發達を目的として貸借でなければ銀行的貸借ではあり得ない。一國經濟の發展を傷付ける樣なものであれば斯る貸出をなす銀行は名は銀行であつても銀行の實を具へない。同時にまた特定の個人のみの利益を計るものは決して銀行業ではない。斯るものは高利貸に過ぎない。……（四）

貸借の確實性とは銀行が公衆の預金を收扱ふより來る銀行業の本質であつて、即ち預金は一般公衆より確實性を保證して借入れたる資金であるから、從て確實性に適合した流動性ある貸出に之を振向けなければ完全なる銀行的貸借關係は成立しないであらう。」

以上の如き余の所說に對して博士は左の如き批評を惠まれて居る。

「凡そ或事物が社會に於て既に或名稱を以て呼ばれて居る場合には、其意義又は解釋は勝手には定められぬ。勝手に定めた意義又は解釋は其人のみの意義又は解釋で、世間には通用しない。社會一般が――少なくとも關係者の多數が――承認する意義を定め、又は解釋を下さんとするならば、其名稱で呼ばれて居る事物を集めて、其全部若くは其多數が共通的に有して居る同時に、他の事物に見られない性質、即ち特質を發見して之を纏めねばならぬ。而して偶まに同じ名稱で呼ばれて居つても、此特質を備へないものは之を除き、之を反對に、他の名稱を冠せられるものでも、此特質を有するものは之を收容する。「自然は飛躍を爲さず」と云はれる如くに、社會の事物も其分界は決して截然明確たるを得ないが、要するに、分類は上述の如くにして定める外ない。然しながら、名稱の用ゐ方は時と場所とに依つて異なることがあるから、同一名稱を以て呼ばれる事物の意義又は解釋も古今東西に於て往々一致しないことのあるを免れぬ。然れば、堀江博士の如く「社會公衆に對して、要求拂の債務を負ひ之を同性質の債權に變形する金融機關を以て銀行と」するのも、英國に於て「バンク」と云ふ語を用ゐる場合には差支ないと思ふが、諸國を通じて一般に「銀行」に適用される解釋としては狹きに過ぐると云はねばならぬ。茲に於て、英國の「バンク」は勿論、他の諸國に於て「バンク」「バンコ」等を以て呼ばれ、殊に我國に於て「銀行」と稱せられるものを包括した場合の意義を知りたいのである。其結果が正しきや否やは別問題として、兎に角上述の如き心掛を以て余は銀行の本質を求め其の意義を定めたので、初めから「自分は斯ふ云ふものを以て銀行業とするのだ」と斷定したのではない。……貸借の「有意義性」と「確實性」と云ふことは、余の定義には欠けて居る。此「有意義性」とは如何なることであるか、十分了解し難いが「單に自己の私服のみ肥し、一國經濟の發展を却て毀くるやうなものであれば、斯る貸出を爲す銀行は名は銀行であつても實は銀行でない。銀行である以上、一般公衆に對して爲めになる處の貸借を行はねばならぬ」と光山氏は唱へて居る。此等の文句に依れば、公共の利益を第一に圖ることが、即ち有意義性と云ふことと推定する。現今の社會に於ても、明かに公益に反することは之を禁止し、銀行も遠慮して居ると思ふが、營利を目的とする一般の銀行に對し、株主の損益は第二にして、第一に公共の利益を圖れと云ふのは、希望すべきことではあるが、今日の經濟組織に於ては無理な註文である。此理想が實現されない銀行は銀行でないと結論するならば「自分勝手に先づ斯る現象を余は銀行業と呼ぶのだと定めてかゝつて……逆に銀行業を命名し說明しやうとして居るに過ぎない」と云ふ非難は、光山氏が之を受けねばならぬと思ふ。第四の「確實性」とは何であるか。光山氏は曰く、「銀行的借入は返濟の確實なることを一般公衆より要求せられつゝあり。從つて其確實性の證明が明確に付せられてあらねばならぬ」と。銀行が其の債務の支拂を確實ならしむべきは當然のこと

で、一般公衆より多額の預金を受け入れて居る場合の如きは、殊に然りである。然しながら、債務支拂義務の確實を要することは銀行にのみ限らない。公債は勿論、社債でも其の元利支拂は約束通り實行されねばならぬ。又保險會社の如きも間違なく保險金の拂渡を爲す可きである。然れば、支拂の「確實性」を銀行のみの特質と見做すことは出來ない。從て之を其定義に掲ぐるが如きことは、却て適當でないと信ずる。」

三

然らば、銀行の本質に關する余の意見と博士の意見との間の相違は何處に存するか。先づその第一は余が銀行業が公共的のものでなければならぬと主張するに對して、博士がそれを否定するの點にある。第二は定義の構成に關して博士が從來の自然科學的傾向を採るに反して、余が「コーエン」の「根源の原理」を定義構成の基礎とする點にある。寧ろ定義の構成に關する斯る見解の相違が、銀行の本質に對して博士が「公共性」を否定するに反して余がそれを肯定するの結果を來したるものである。從て吾々は先づ銀行公共性の問題を論議するに先立つて、定義の構成に關して一言する所がなければならない。

四

凡そ從來の自然科學者に依れば定義なるものは過去並に現在の經驗を集めてその共通性を求めたものであつて、博士もまた同一意見を保持して居られる樣に見える　現に博士は「社會一般が承認する意義を定め、又は解釋を下さんとするならば　その名稱で呼ばれて居る事物を集めて其全部若くはその多數が共通的に有して居ると同時に他の事物に見られない性質即ち特質を發見して之を纏めねばならぬ」と云つて居られる。乍然、果して斯くの如きものが眞の定義と云はれ得るであらうか。何となれば斯る定義は結果として既に現れた處の過去の現象を整理せるに過ぎないものであるからである。眞の定義は事物の本質を摑んで居なければならぬ。單に過去の經驗の統一されただけのものであると、時の進歩に從て新らしい經驗の現れるに連れ、斷えず定義が改變されなければならない結果になる。勿論自然科學の如き時と關係の少ないものにあつては、過去の經驗は即ち將來の經驗であるからして、過去の經驗の統一である定義も同時に、將來の經驗の統一に代用せられ得るのであるが、時代の進歩と密接なる關係にある經濟學の如き現實科學にあつては、單に過去の經驗の統一は決して本質を摑んだ眞乎の定義とは云へないものである。從て問題は經濟學に於て本質を捕捉するには如何なる方法を採用すべきかに存する。之に對して博士は從來の自然科學者がやつたと同一の方法を以てすべしと主張するのであるが、余は經濟學にあつては其本質の捕捉はコーエンの主張するが如き「根源の原理」に從て根源に遡る事に依てのみ可能であると信ずるものである。寧ろ從來の自然科學も斯る根源の原理に依る本質捕捉の方法を採るならば、一層よく科學の體系を構成し得るに至るであらう。余は不完全なる從來の本質捕捉の方法をば經濟學に適用しないからと云つて攻擊を受くる事は甚だ不愉快である。博士は「理想が實現されない銀行は銀行でないと結論するならば、自分勝手に先づ斯る現象を余は銀行業と呼ぶと定めて掛つて、逆に銀行業を命名すると云ふ批難を受けなければならない」と云つて居られるが、理想に依て現實を限定指導する定義の仕方は決して博士の云はるゝ樣に自分勝手な命名論ではないと思ふ。寧ろ過去や現在がかうであるから、

事物の本質は何時までもそうでなければならないと考へる博士の方が遙かに獨斷的ではないか。經濟生活の本質を摑むのに過去や現在の狀態を標準とするのは因襲を標準とする囚はれたる方法である。經濟生活の眞の本質を摑むためには、過去、現在並に將來の總ての根源に遡らなければならぬ。即ち吾々は過去の經驗に囚はれてはならない。然し過去の經驗を掘下つてその根源に横はつて居る永遠の光に接しなければならない。同樣にまた吾々は現在の經驗に囚はれてはならない。現在の經驗を掘下つてその根源に横はつて居る理念に觸れなければならない。永遠の光を發する斯る理念に依てのみ經濟生活の本質は理解せられ、眞の定義は可能となるのである。

以上の如くであるが故に、過去並に現在の經驗を深めて理想の光を發見し、それを定義として經濟學上の議論を進めて行く事は決して勝手なる命名論ではなく、最も根源深き基礎付けであらうと思ふ。博士の論法を用ゐるならば、世界の銀行組織が變化して銀行業の色彩が異つて來るに從て、その都度銀行業の定義を變更して行かなければならない事になる。具體的に之を云ふならば、博士の銀行業に對する定義は現代資本主義經濟組織下に於ける銀行業の定義である。余はグスタフ・カッセル教授の主張せるが如く社會主義經濟組織の下に於ても矢張り銀行業の存在を考ふるものであつて、寧ろ斯る社會組織の下に於てこそ、一層完全なる金融作用を可能ならしめる理想的の銀行業を見るものであるとすら考へて居るものである。博士は公共性なくしても銀行業は可能なるが如く主張せられて居るが、果してそうであらうか。銀行業にして公共性を重んぜざらんか、預金は減少し資本は固定して完全なる銀行業務を不可能ならしむるのみならず、一國全體の金融作用も不圓滑とならざるを得ないのである。銀行の銀行たる所以は國民の資金を資本化するのみでなく、更に進んでその資本を最も國力の增進を來す樣に指導して行かなければならない。然らずんば銀行に預けらるゝ預金も減少し、銀行の貸出も固定するに至らざるを得ないであらう。ダグラス氏も主張する樣に、現代の社會に於ける銀行の力は偉大なるものであるが故に、銀行がその力を國民全體の利益を增進する樣に公共的に働かせないと云ふ事は實に緒々しき社會問題を齎すものではなければならない。少くとも金融作用の圓滑と云ふ點から見ても銀行業は公共性を重んずる必要がある。博士の云ふ樣に銀行業は單に「貨幣の需要者と供給者との間に立ち自己の計算に於て廣く兩者と取引を行ふ業務」であるとするが如きは、銀行業の消極的限界を示したものに過ぎない。それは恰も人間を定義して、「人間は言語を解する動物なり」と云ふの類に外ならない。然し吾々は斯る消極的なる定義を以て眞の定義とする事は出來ない。自然科學の世界に於ては兎に角も、現實科學の世界に於ては斯る定義は少しも新らしい知識を供給した事にならぬからである。吾々は人間を定義して寧ろ「精神的向上の能力ある動物なり」とするを必要とする如く、同樣にまた銀行業の定義も單に「貨幣貸借を通じて資金の需給を計る業務なり」と云ふに止まらず、更に進んで眞の銀行業は「國民財力の指導機關たらざる可からず」とすべきであると思ふ。斯る積極的定義の方が現實科學に採つては遙かに眞に近いからである。勿論總ての銀行業は必ずしも國民財力の指導機關ではないかも知れない。乍然、吾々の現實科學を背景

として意味する事は過去や現在の銀行業が國民財力の指導機關であるかないかではない。問題は寧ろ銀行業は今後は國民財力の指導機關でなければならない事を力說するにある。余は斯る行動的、立體的なる立場に從來の我金融學者が目醒めない事を悲しむものである。金融學者が斯る金融作用の行動的、全體的、有機的方面に目醒むるに至らんか、我國の金融界も一段の發達を促さるゝであらうと思ふ。現に米國の金融學者はプラーグ教授、ムルトン教授、バーカー教授等を初めとして、益々最近は金融作用の動的有機的方面の理解を深め、銀行組織改善論に於て、準備銀行利率指導論に於て或は市中銀行の貸出政策論に於て傾聽に價する學說を示して居る。然るに日本の金融學者は消極的定義を中心として居るが故に、自然過去の因襲に囚はれ、財界金融界を現實に指導するが如き、生きた學說を殆んど發表して居ない。然し斯く云へば或は博士は余の言は餘りに熱情的であると評せられるかも知れないが、熱情のない所に生れた眞理はないのである。

五

要之、銀行業が公共的であるや否やの問題は結局經濟學をザインとして取扱ふ可きか、ゾルレンとして取扱ふ可きかと云ふ立場の問題に歸着するのである。從て余は此銀行業が公共的であるや否やの問題を取扱ふに先立つて、先づ以て經濟學の正當なる立場は何であるかと云ふ事に就て一考しなければならない。

凡そ從來の經濟學者は經濟學を以て一個の經驗的存在科學と看做し、從て「である」を以て經濟學に對する根本の立場とし、「でなければならぬ」を以て一個の倫理的立場とし、經濟學の立場に非ずとして居る。乍然果して斯る態度は妥當なるものであらうか。從來の經濟學者自身もその實「でなければならぬ」の立場に立つて經濟學に關係して居ながら自からは夫に氣が付かないのではあるまいか、先づその好例はマルクスの態度であると思ふ、即ちマルクスは經濟價値は勞働の結晶であると云つて居るが、必ずしも總ての經濟價値は勞働の結晶ではない。然らばマルクスの考へは間違つて居るかと云ふと必ずしもそうでない。何とならば眞實の經濟價値は勞働の結晶物でなければならぬからである。恐らく眞實の經濟價値が勞働の結晶物でなければならぬと云ふ理想に至つては、何人も之を否定し得ぬ處であらうと思ふ。故にマルクスは自分の說を間違なく主張する爲めには「經濟價値は勞働の結晶でなければならぬ」と云ふ可きであつた。然るにマルクスの資本論第一卷は余の通讀したる處より云へばマルクスは決して「でなければならぬ」とは書いて居ない。「である」としか書いて居ない。從て後世の學者達は勞働の結晶でない經濟價値が此處にもある。彼處にもあると云ふ事を指示する事に依て、マルクスの意見の間違を指摘するに至つたのである。然し斯る學者達は要するに頭が惡るくてマルクスの眞意を汲んでやれない人々に過ぎない。眞にマルクスを理解せんとするものは、マルクスが「である」と云つたその言葉のうちに「でなければならぬ」と云ふ根本の精神を發見す可きではなからふか。要するにマルクスは「であるべきだ」と云ふ可き處を「である」と云つて仕舞つたのである。勿論「である可きだ」と云ふ可き處を「である」と云つたマルクスは、間違には相違ないが吾々はよくこの間違を仕易いものである。此の間違を許さないならばマルクスの資本論は矛盾に滿ちたものになるであらう。

以上の如くであるが故に、少くともマルクスは資本論を「である」の形式の下に「である可きだ」の精神を以て書いたと云へよう。さればこそ今日尙マルクスの資本論が生命あるのではないのか。斯ふ云ふことを考へて見るならば、マルクスは確かに經濟學に對して「である可きだ」の立場を取つたものと云へようと思ふ。のみならず其他のあらゆる經濟學も「である」の形式の下に「である可きだ」を主張しつゝあるものではなからうか。吾々は果して經濟學の世界に於て全然間違ないように「である」と云ふことを云へるであらうか。恐らく如何に完全に「である」と云つた處で、必ず時の經過と共に例外の場合が澤山出て來て「でない」ことになるのではないかと思ふ。然し經濟は斯くの如きものでなければならぬと云ふ精神に至つては、それが間違つて居ない限り例外は出ないであらうと思ふ。何とならば社會組織が惡いために例外が出たにしても、去る例外は結局は除去さる可きであるからである。例へば眞實の所有は勞働の蓄積物でなければならぬと云ふことは、假令現在に於ては勞働の蓄積物でない所有の澤山あるために「である」「ザイン」ではないけれども、社會組織の改造さるゝに從て、漸次「ザイン」に接近して行くのではないであらうか。「でなければならぬ」と云ふ言葉はなるほど現在では「である」「ザイン」ではないけれども、將來は「である」「ザイン」となる可き性質のものではないであらうか。寧ろ將來「ザイン」となる可き必然性のある現在のゾルレンに就て論ずること經濟學の任務ではないのか。少くとも私は經濟學なるものは將來必ず經濟的ザインとなる可き處の經濟的ゾルレンを明らかにすることを以て中心問題とす可きであると考へる。換言すれば經濟學は過去や現在に屬す可きものでなくて將來に屬す可きものと思ふ。然り經濟學は行動の科學（Behavia Science）であり、改造の科學であると思ふ。余が銀行は公共の機關であると云ふのも、その實は將來銀行は公共の機關となると云ふことを意味するものである。現在の銀行が公共の機關であると云ふのではない。現在の銀行が公共の機關でないことは余もまた之を知る。問題は將來果して銀行は公共の機關たる可きや否やと云ふ點にあるのである。銀行が眞に公共の機關たる可きものであることが明かになれば、社會組織の改造を通じて人類は銀行を公共の機關たらしむるに至るから、銀行も將來は公共の機關たるに至るであらう。然るに山崎博士は銀行の定義を以て過去並に現在の銀行業が斯々であるから斯く定義す可きであつて、將來を中心として銀行を定義するものは自分勝手の命名論であると云つて居られる。然し果してそうであらうか。將來を中心として銀行業を定義する事が自分勝手の銀行業の定義であると云ふのは余には甚だ受け取れぬ說である。銀行業が本質的に見て立派に公共性を具備す可きものである限り、銀行を以て公共的機關たらざる可からずと爲し、銀行業を以て公共性を帶ぶる處のものならざる可からずと力說することは何等自分勝手の命名論ではあるまいと思ふのである。

六

然らば果して銀行業は公共的のものでなければならぬか。銀行業が本質的に見て公共的でなければならぬと云ふ確實なる證左があるか。余はこれから此の疑問に對して答ふる處がなければならぬ。

山崎博士は銀行業の本質中その事實的要素（ザイン）である貨幣貸借のみを認めてその理想的要素（ゾルレン）であ

る公共性をば現代資本主義經濟組織の下に於ては無理な註文であると云つて居られる。然し果してそうであらうか。余は現代資本主義經濟組織の下に於てでも銀行業の公共性は必要不可欠のものと認める。何故であるか。是れ銀行業が公共的でないならば、金融作用の完全圓滑は之を期し得られないからである。現に流動資本の大半を支配して居る銀行にして、その流動資本を不良性の貸出に固定したならば、經濟界は金融硬塞に依る一般市場性の欠乏よりして恐慌を來さぬであらうか。假令恐慌を來さぬにしても、經濟界は活動力を殺がれてその發達を阻止せられ、延いては銀行の預金は減少し益々金融作用の不圓滑を來すに至るであらうと思ふ。銀行家が財界の前途を考慮し、景氣循環の季節を研究して且つ國力の增進に資し得るが如き有意義なる取引、生産に資本を振向け、依て以て一國經濟界の指導を爲すと否とは、單に經濟界發達の爲めのみならず、また金融界自體の發達にも多大の影響を有するものである。事情斯くの如くであるが故に、余は銀行業が公共的たる可きことは現代資本主義經濟組織の下に於ても必要なる要件であつて、決して博士の論ずる樣に無理な註文でもなんでもないと思ふ。余は我國金融學者の隨一たる山崎博士にして「無理な註文」だなどの言あることを我國の爲めに悲しむものである。資本主義の本山である米國銀行界に於てすら、最近は銀行の公共性が認めらるゝに至つたのに、我國が尙斯る傾向に盲目であることはさても遺憾の極みである。

要するに金融作用の圓滑を可能ならしむる根本要素である「公共性」をば銀行業の本質として認めざる博士の所論は、干物魚を以て生ける魚を律せんとするものに外ならない。銀行業を以て單に貨幣貸借と云ふ事實的要素のみに限るものは銀行業の干物魚論である。定義として間違ては居ないが實に重要なる要素を看過せる點に於て不完全なる定義である。博士はもつと現實の銀行業をその生けるがまゝに見なければならぬ。勿論經濟學なるものが現實科學でなければ兎に角も經濟學なるものが刻々に生々發展する現實を對象とするものなる以上、その所論もまた現實の上に打建てられなければならぬものと信ずる。博士は從來の自然科學的の殺物的觀測法に依て銀行業を定義せるが故に、博士の眼には干物魚的銀行業が眞の銀行業として映ずるに至つたのであるが、少くとも銀行業の眞に徹し、作用中心の生ける銀行論を構成せんとするならば、どうしても進步性、完全性、理想性の上に立てる活物的觀察法を通じて、生けるがまゝに銀行業を理解しなければならぬと思ふ。余は斯る立場に立つが故に、銀行業の公共性の方を遙かにその貨幣貸借作用よりも重大なる要素に考へるものである。抽象的に考へるから公共性と貨幣貸借作用とは分離して存在して居る樣に見えるのであるが、具體的に見るならば公共性と貨幣貸借作用とは決して二物ではないのである。寧ろ同一物の二面である、公共性あればこそ貨幣貸借作用はそれだけ存在性を有するのである。公共性がなくなるならば貨幣貸借作用はその完全なる存在性を失つて遂には高利貸の如きものに墮するに至るであらう。我國の銀行業は形式的、干物魚的に見るならば銀行業であるかも知れないが、內容的、具體的に見るならば確かに未だ高利貸の範圍を脫しないことは已に識者の認めて居る處であらうと思ふ。余は從て公共性を看過して銀行業を抽象的に定義することの不可なることを痛感するものである。

七

以上に於て余は現實科學の立場よりすれば公共性を以て銀行業の定義の第一要素に數へなければならぬ事を明かにしたのであるが、然し此公共性なるものは之を國有の如き事と混同してはならない。即ち銀行業が公共的でなければならぬと云ふ事は、銀行業が國有とされなければならないと云ふ事を意味するものではない。これ銀行業の公共性とは銀行業が可能ならしめる所の金融作用を最も良く指導して完全なるものにする事を意味するものであつて、單に金融作用を可能ならしめる銀行業の主體が私人たると公人たるとを問はないからである。銀行業の主體が私人から公人に移つた處で肝心な金融作用の指導が拙であるならば何の役にも立たないのである。要は如何にして金融作用の指導を一層良く行ふ可きかである。此のためには銀行組織の改善も必要であらう。銀行貸出政策の改善も必要であらう。中央銀行の兌換制度並に割引政策の改善も必要であらう。然しその根本的の要件は銀行業者の自覺である。從來の如く銀行業者が一にも二にも利益を標準にして銀行業を經營して行くのでは、何時まで經つても金融作用の完全なる指導は之を望まれない。勿論利益を求める事は惡い事ではないが、之を銀行業經營の標準とするのが惡いのである。銀行業經營の眞の標準は、一國生産物の增加を計ると共にその生産物の公平なる分配を可能ならしめる可き點にある。換言すれば經濟界の指導にある。斯る經濟界指導の結果として報酬を收得する事は差支へはないが、斯る報酬の如何を標準として銀行業を經營してはならない。元來銀行業なるものは合理的な理詰な業務であるが故に、利益を主としないで統計的に報酬本位で經營出來る可きものと信ずる。例へば銀行は經費並に重役の報酬に預金の原價を加へたるものより算定して貸出利率を決定し、以て銀行經營をなして行く事も出來るものである。勿論貸倒れの危險はあるであらうが、これも統計をとつて經費の中に算入すれば良いであらう。資金の需給關係が金利に及ぼす影響は、大體預金原價の算定を種々に變更する事に依て充分之を考慮する事が出來ようと思ふ。

斯くの如くして銀行業が從來の如き利益本位の立場からして報酬本位の立場に變り、財界指導を以て根本の標準とするに至らんか、恐らく從來の如き放漫なる貸出過度の警戒や無謀なる放資に依て金融界の硬塞を來し金融作用の圓滑を害する樣なことはなくなるであらう。また現に銀行業の集中、銀行業の大經營化は益々銀行業の斯る公共的色彩を高めつゝあるを見受けるではないか。（大正十三年十月一日）

雜　報

○理財學會秋季大會　十一月六日午後二時より三十二番教室に於て開催演題左の如し

一佛蘭西學派の經濟學　增井幸雄氏

一雜感　及川恒忠氏

一日支貿易關係に就て　小村俊三郎氏

閉會後萬來舍に於て晩餐會を催し午後八時半散會す、出席者左の如し

小村俊三郎氏　堀江先生　增井先生

三年幹事　夏目

二年幹事　檜原　後藤　濱谷

一年幹事　奥田　平野　田中　寺本